

[原著論文]

## 教員養成課程に所属する大学生の安全への意識

出町一郎\*・鈴木美枝子\*\*

### 要 約

本研究は教職を志望する学生の安全に関する意識を広く把握することを目的に質問紙調査を行い三種の分析を行った。最初の分析では教職志望の学生の危険に関する一般的な意識を考察した。その結果「自転車」、「バイク」、「自動車」領域は危険意識が強かった。「交差点・横断歩道」や「運動」領域でも危険の認識が強かった。「食品・嗜好品」領域では危険の意識が低かった。次に教職志望の学生に関して、危険との認識はあるが現実には行ってしまう行動を調べた。その結果「自転車に乗る前に整備を行わない」、「携帯電話を見たり操作しながら歩く」等が上位で「交差点や横断歩道での安全確認をしない」、「運動時に十分な水分補給をしない」等が下位であった。最後に教職志望の学生群と志望しない学生群とで危険に関する意識の差を調べた。ここでは全般的に教職志望の学生群が危険をより認識していると推察される項目が多かった。教職志望の学生群の方が危険と認識しているのは「歩行・ながら歩き」、「自動車」、「運動」等の領域と考えられた。教職志望の学生群の方が危険の認識が薄いと推察されるのは「交差点・横断歩道」、「自転車」領域であった。

キーワード：教員養成課程，教職，大学生，危険，意識

### 1 はじめに

小学校，中学校等の各種教員を養成している大学ではなんらかの形で学校での安全に関する指導をしている。「学校安全」あるいは「安全教育」などの直接的に学校での安全にかかわる科目を開講したり，あるいは各教科教育の中で学習の前提としてあるいは一環として安全に関わる部分に触れることもあろう。

もっとも安全に関わる科目が開講されていようとなかろうと，あるいはそれが必修であろうとなかろうと，子どもの教育にかかわる者は当然安全の確保に努めなければならないはずである。

将来学校等において教師として教育にかかわるであろう教職課程の大学生は安全に関してどのような意識を持っているであろうか。まず最初に触れたいのは教職課程の学生に関するこ

した調査は非常に少ないということである。散見される中でも、教員養成に関わる学生の安全への認識については、孔ほか<sup>1)</sup>や藤井ほか<sup>2)</sup>など理科教育に関する報告がある。また保育実習生の意識に関して報告がなされている<sup>3)</sup>。一方、教員養成課程ではない大学生については看護学生の実習前後の安全への意識に関する報告が行われている(矢吹ほか<sup>4)</sup>など)。

これらは実習や実験等に関する報告であるが、今回は教職課程の大学生に関し日常生活も含めた安全に関する広い意識について調査を行う。教職課程の大学生は何を危険と考え、そしてその考えの下でどのように行動しているかを探ることを目的とする。教職を志望する学生の安全に関する意識・行動に関する実態をまずは把握することに努めたい。

## 2 研究の方法

### (1) 調査対象

関東地方にある私立大学三校に所属する大学生を対象とする。幼稚園、小学校、中学校、高校のいずれかの教員免許状取得(あるいは保育士資格取得)を目指す学生(以下「教職志望」)と、比較対象群としてそうした教員(あるいは保育士)を目指さない大学生を対象にした。合計で95名の大学生に質問紙を配布し、全95名から回収した。従って質問紙の回収率は100%である。そのうち有効回答数は94だったので、有効回答率は $94/95=98.9\%$ である。有効な回答をした94名の中で、教職志望の学生は49名で、非教職志望の学生は45名であった。回答した学生は、教育学部、文学部、経済学部いずれかの所属であった。

### (2) 調査方法

本研究は質問紙調査にて行った。質問項目の作成は、安全教育や安全学等に関わる文献(荻須ほか<sup>5)</sup>、荻須ほか<sup>6)</sup>、古田ほか<sup>7)</sup>、村上<sup>8)</sup>など)や自然災害や各種の事故に関する文献(山下<sup>9)</sup>、独立行政法人日本スポーツ振興センター<sup>10)</sup>、独立行政法人日本スポーツ振興センター<sup>11)</sup>など)、身体やスポーツ科学に関する文献(宮下ほか<sup>12)</sup>、東京大学身体運動科学研究室<sup>13)</sup>など)、あるいは事故や危険に関する報道などをもとに作成した。大学生の安全に関わる広い認識を探るために、飲食、交通、携帯電話、運動、災害等の様々な分野から質問を構成した。表1に本研究で使用した質問項目を示した。表1では後述の「普段の行動」に関する質問文とそれを分類した領域を示している。

質問紙は、学年や教職希望の有無等を記入するデモグラフィックスに関する部分があり、その後、具体的な質問内容になる。表1の質問項目に関して尋ねる部分は大きく二つに分かれており、一つは「普段の行動」について、もう一つは「安全・危険に関する認識」を問う設問から構成され、50問ずつあり全部で100問である。そして設問はその二つで基本的には対応して

いる。例えば、「駆け込み乗車をする」ということがらに関し、「普段の行動」として行うかどうかと、それとは別にその行為を危険と認識するか否かを問うている。普段の行動の項目については「いつもおこなっている」から「まったくおこなわない」までの4件法で、安全・危険に関する項目では「かなり危ない」から「全く危なくない」までのこちらも4件法で尋ねた。ただし、「普段の行動」に関し、「地震に対する備え・対策」(No. 49)と「火災に対する備え・対策」(No. 50)についてのみ回答の項目は「かなり準備している」、「やや準備している」、「あまり準備していない」、「全く準備していない」となっている(「安全・危険に関する認識」を問う設問については他と同じ回答の選択肢である)。また、表1の分類での「自転車」、「バイク」、「自動車」、「運動」に関する設問に関し、「普段の行動」に関してのみ、普段その行動をしないという趣旨の回答の選択肢を用意した(例えば、「普段自転車に乗らない」や「普段運動をしない」など)。この普段その行動をしないという趣旨の選択肢を回答したサンプルについてはそれぞれの項目で有効回答としては扱うが各種の計算・分析からは省いた。

また、参考としてあるいは比較の対象として、相応に危険が伴うと考えられる一般的・日常的な行動に関する項目を入れ込んである。それは「包丁を使う」(No. 25)、「はさみ、カッターを使う」(No. 44)、「カミソリを使う」(No. 45)、「電子レンジを使う」(No. 26)、「ガス機器を使用する」(No. 27)、「傘をさす」(No. 43)〔現実に行う行動に関する質問文では「傘をさす時の周りの人への安全面での配慮」〕の6項目である。これらは以下原則としては分析の対象とはせず、必要に応じて参照する項目として扱う。

質問紙の中には、この表1の項目に関する「普段の行動」と「安全・危険に関する認識」を問う設問の他に自由記述の設問が一つあるが、本研究はこの部分には触れない。

質問紙は無記名式で、調査に先立ち回答は統計的に処理され個人が特定されないことや調査の趣旨を対象者に説明し、回答をもって調査への同意とした。

調査の時期は2013年7月である。

### 3 研究結果と考察

#### (1) 教職志望学生の安全意識

まず教職を志望している学生の安全・危険に関する意識を集計した(図1)。「かなり危ない」、「やや危ない」、「あまり危なくない」、「全く危なくない」の多い順に並べ替えた。

これをみると、「食品/食材の購入時に添加物を確認しない」、「食品/食材の購入時に産地を確認しない」、「賞味期限の過ぎた食品を食べる」など「食品・添加物」の領域で危険の認識が相対的に低いように思われる。また「交差点・横断歩道」の領域に関しては、「赤信号で道路の横断をする」、「交差点や横断歩道での安全確認をしない」などで危険の認識があるものの、「横断歩道で信号の点滅時に横断する」に関しては危険の認識が低いようだ。「自転車」の領域

表1 使用した質問とその領域 (1)

領域	設問No.	設問
食品・嗜好品	1	たばこを吸う
	2	お酒を飲む
	3	賞味期限の過ぎた食品を食べる
	4	食品/食材の購入時に添加物等を確認する
	5	食品/食材の購入時に産地を確認する
	6	食事の前や帰宅時に手を洗う
交差点・横断歩道	7	交差点や横断歩道での安全確認
	8	横断歩道で信号の点滅時に横断する
	9	横断歩道がないところで道路の横断をする
	10	赤信号で道路の横断をする
自転車	11	自転車に乗る前に整備を行う
	12	自転車に乗るときに安全運転を心がける
	13	自転車に夜乗るときのライト点灯
	14	自転車に乗りながらの携帯電話の操作
	15	自転車に乗りながら携帯電話で通話する
バイク	16	バイク（原付も含む）に乗る前に整備を行う
	17	バイク（原付も含む）に乗る時に安全運転を心がける
	18	バイク（原付も含む）に乗りながらの携帯電話の操作
	19	バイク（原付も含む）運転中に携帯電話で通話する
	20	バイク（原付も含む）に乗る時しっかりヘルメットをかぶる
自動車	21	車の運転をする前に整備を行う
	22	車の運転をするときに安全運転を心がける
	23	車の運転をしながらの携帯電話の操作
	24	車の運転をしながら携帯電話で通話する

に関しては、「自転車に乗る前に整備を行わない」ことに対する危険性の認識が低い一方、「自転車に乗るときに安全運転を心がけない」、「自転車に夜乗るときのライト点灯しない」、「自転車に乗りながらの携帯電話の操作」、「自転車に乗りながら携帯電話で通話する」にはかなりの危険の認識が感じられる。「バイク」と「自動車」の領域に関しても同様の傾向がみられ、「バイク（原付も含む）に乗る前に整備を行わない」と「車の運転をする前に整備を行わない」の乗車前の整備に関しては危険の認識が低い、例えば「バイク（原付も含む）に乗るときに安全運転を心がけない」、「車の運転をするときに安全運転を心がけない」、「バイク（原付も含む）に乗る時にしっかりヘルメットをかぶらない」、あるいは「バイク（原付も含む）に乗りなが

表2 使用した質問とその領域 (2)

領域	設問No.	設問
刃物	25	包丁を使う (＊)
	44	はさみ, カッターを使う (＊)
	45	カミソリを使う (＊)
家電・ガス機器	26	電子レンジを使う (＊)
	27	ガス機器を使用する (＊)
	28	ガス機器の使用時は換気扇を使うか窓を開ける
	29	コンセントに濡れた手で触る
その他	32	寝たばこを吸う
歩行・ ながら歩き	30	かかとの高い靴を履く
	31	歩きながらたばこを吸う
	33	携帯電話を見たり操作しながら歩く
	34	歩きながら電話の通話をする
	35	本や雑誌を読みながら歩く
	36	ipod等の音楽用機器を使いながら歩く
	43	傘をさす時の周りの人への安全面での配慮 (＊)
運動	37	運動前の準備運動
	38	運動後のクールダウン
	39	運動時の水分補給 (十分なもの)
	40	長時間の運動
	41	炎天下の運動
	42	競技水準が違う人が同時に運動すること
電車・駅	46	駅のホームの端を歩く
	47	駆け込み乗車をする
	48	電車の優先席近くで携帯電話を使用する
災害	49	地震に対する備え・対策
	50	火災に対する備え・対策

・ No. 43 の設問は危険・安全に関する認識の設問では「傘をさす」の文言

・ ＊は分析の対象から外した項目

らの携帯電話の操作」, 「バイク (原付も含む) 運転中に携帯電話で通話する」, 「車の運転をしながらの携帯電話の操作」, 「車の運転をしながら携帯電話で通話する」など安全運転の要請や携帯電話の使用には高い反応を示している。またこの三者を比べると「自転車」, 「バイク」, 「自動車」の領域の順に危険の認識度が増す傾向がみられる。

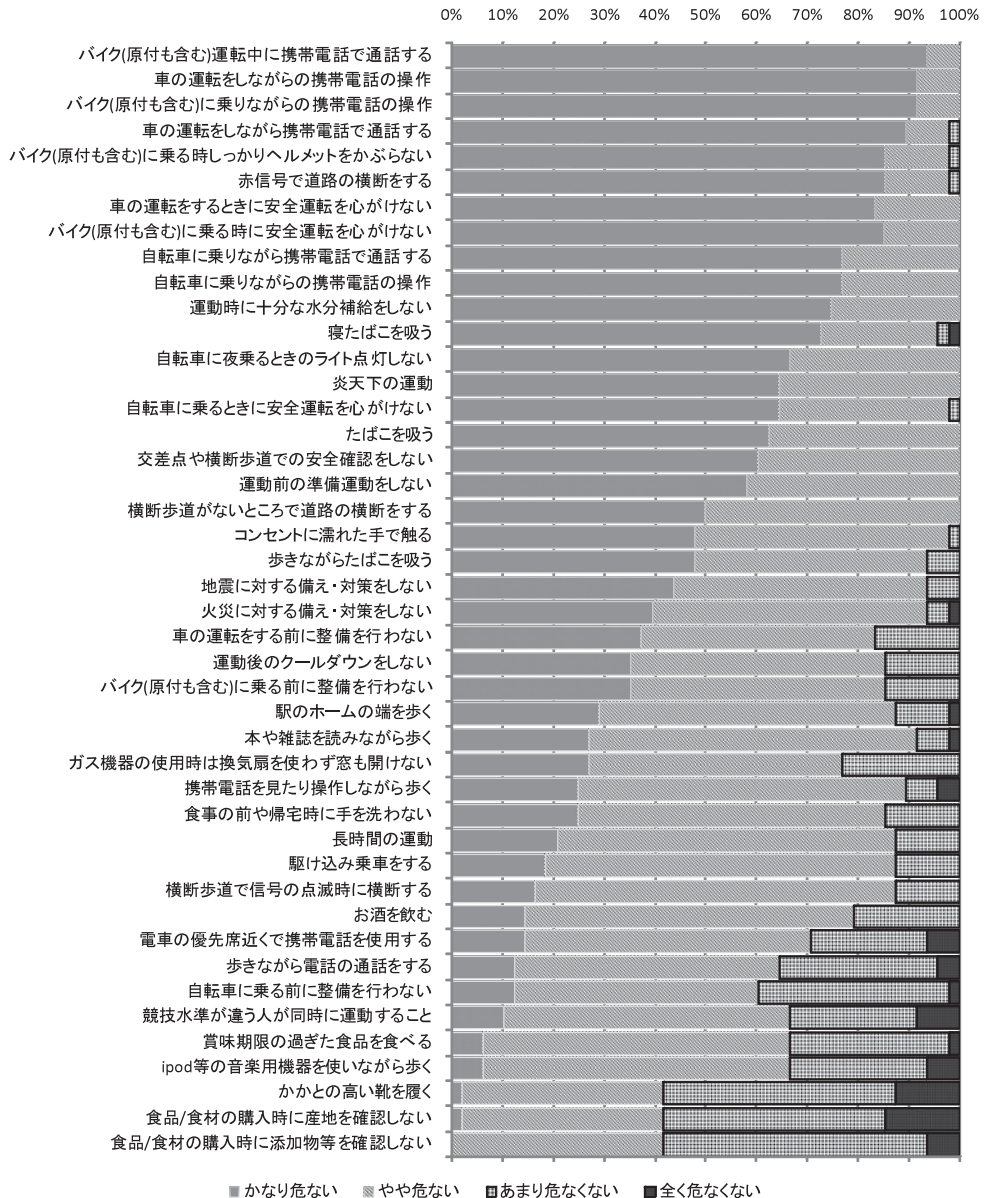


図1 教職志望学生の安全意識

「家電・ガス機器」の領域では、「コンセントに濡れた手で触る」がもっとも危険性の認識が高く、次が「ガス機器の使用時は換気扇を使わず窓を開けない」であった。

「歩行・ながら歩き」の領域では、「歩きながらたばこを吸う」の設問がもっとも危険と認識されている。その次に「本や雑誌を読みながら歩く」が危険と認識され、「携帯電話を見たり操作しながら歩く」、「歩きながら電話の通話をする」、「ipod等の音楽用機器を使いながら歩く」、「かかとの高い靴を履く」の順に危険の認識は薄れていく。

「運動」領域に関する設問の中では、「運動時に十分な水分補給をしない」というのがもっとも危険という認識で、以下「炎天下の運動」、「運動前の準備運動をしない」、「運動後のクールダウンをしない」、「長時間の運動」、「競技水準の違う人が同時に運動すること」の順に危険との認識は少なくなっていく。

「電車・駅」の領域では、「駅のホームの端を歩く」がもっとも危険の認識が高い。「電車の優先席近くで携帯電話を使用する」はもっとも危険性の認識が低い結果となっている。

災害に関する設問では、「地震に対する備え・対策をしない」と「火災に対する備え・対策をしない」がほぼ同じ割合でわずかに地震の方が危険の認識が高いようだ。他の設問で言えば「歩きながらタバコを吸う」と同じくらいの数値を示している。

## (2) 教職志望学生による危険を認識しながら行う行動

次に、教職志望学生について、危険とは認識しながらも行ってしまう行動は何かということ进行分析した。安全・危険に関する認識を問う設問の各項目に関して、「かなり危ない」または「やや危ない」と回答した回答者の中で、普段の行動に関する設問に関する回答で同じ項目に関し、「いつもおこなっている」または「たまにおこなっている」と回答した人の比率を調べた(図2)。ただし、普段の行動に関する設問は一般的に危険と考えられる行動を例示してその実施の有無を聞く聞き方と、一般的に安全と考えられる行動を例示してその実施の有無を聞く聞き方が混在しているので、一般に安全と思われる行動が例示されている設問は集計を反転させた。つまりそうした設問に関しては「あまりおこなっていない」または「全くおこなわない」と回答した比率を調べた。また「かなり危ない」または「やや危ない」との回答数が極端に少なかった設問は省略した。以下この項では各設問において危険を認識した学生を100とした時の値を示していく。

その結果、もっとも比率が多かったのは「自転車に乗る前に整備を行わない」であった。これは危険と認識している学生のうち95.2%が乗車前に整備をせずに乗っている。次は「携帯電話を見たり操作しながら歩く」で90.7%であった。

ほぼ半数になるのは「駅のホームの端を歩く」(52.4%)、「炎天下で運動をする」(47.7%)で、このあたりは危険と認識している学生の約半数が行い、約半数がやめているようだ。

実際に行う行動が少ないのは、「運動前に準備運動をしない」(6.8%)、「交差点や横断歩道での安全確認をしない」(6.3%)、「運動時に十分な水分補給をしない」(4.5%)である。危険を認識し行動を回避しているようである。

同種の設問をまとめて分類しその傾向をみると(表1及び表2の「領域」)、「交差点・横断歩道」の領域に関しては、「交差点や横断歩道での安全確認をしない」(6.3%)と交差点や横断歩道で安全確認をしない学生は少ないが、「横断歩道で信号の点滅時に横断する」(88.1%)、「横断歩道がないところで道路を横断する」(87.5%)などの行動は、危険を認識しつつも9割

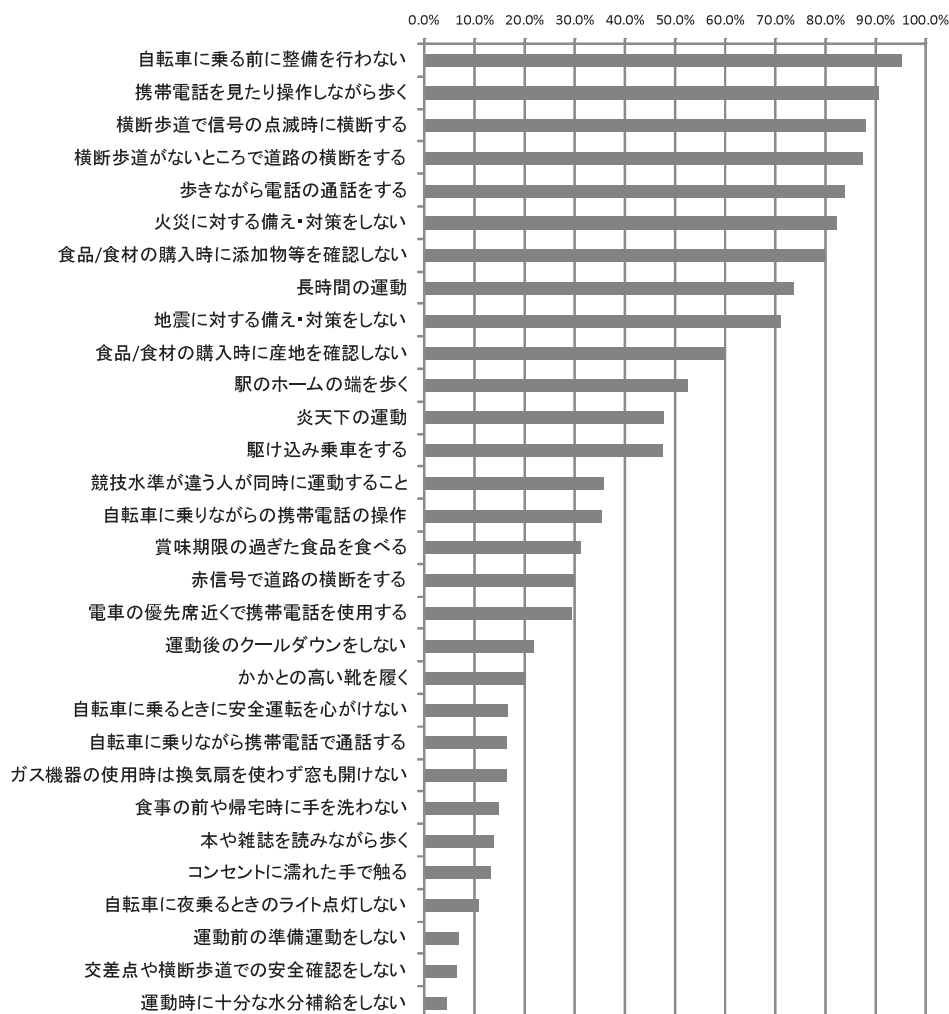


図2 教職志望学生による危険を認識しながら行う行動

近くの学生が行っている。

「歩行・ながら歩き」の領域に関しては、「携帯電話を見たり操作しながら歩く」(90.7%),「歩きながら電話の通話をする」(83.9%)というように歩行中の携帯電話の操作や閲覧あるいは通話は80%以上の学生が危険を認識しつつも行っており、「ipod等の音楽用機器を使いながら歩く」が75.0%と音楽機器を使用しながらの歩行も4分の3に相当する学生が行っている。一方、「本や雑誌を読みながら歩く」は13.6%にとどまっている。

「電車・駅」の領域では、「駅のホームの端を歩く」(52.4%)や「駆け込み乗車をする」(47.6%)は50%前後の数字であるが、「電車の優先席近くで携帯電話を使用する」のは29.4%と多少少ない結果となっている。

「自転車」に関しては、前述のように「自転車に乗る前に整備を行わない」(95.2%)が圧倒

的に多いが、それ以外は多い順に「自転車に乗りながらの携帯電話の操作」(35.1%)、「自転車に乗るときに安全を心がけない」(16.7%)、「自転車に乗りながら携帯電話で通話する」(16.2%)、「自転車の夜乗るときのライト点灯しない」(10.8%)となっている。自転車に乗りながら携帯電話を操作する学生が3分の1以上いることがわかる。

「運動」領域関連では、「長時間の運動」が73.7%とかなり多くなっている。危険だとはわかっているけれど、なんらかの理由で長時間の運動をしてしまっているのだろうか。次は前述の「炎天下で運動をする」(47.7%)は半分以下の数字となっている。以下「競技水準が違う人が同時に運動すること」(35.7%)、「運動後のクールダウンをしない」(21.6%)、「運動前に準備運動をしない」(6.8%)、「運動時に十分な水分補給をしない」(4.5%)の順になっている。危険を認識している学生の中で準備運動をしない学生は少ないが、クールダウンをしない学生は3倍程度いることがわかる。また長時間の運動にしろ、炎天下の運動にしろ、“危険”と考えられる運動をする場合でも、水分の補給は行っている。

### (3) 教職志望学生と非教職志望学生の比較

次に教職を志望している学生と志望していない学生の比較を行う。危険の認識に関する違いを探るのが目的である。

質問項目後半の、安全・危険に関する認識を問う設問に関して、教職を志望している学生と志望していない学生の2群の違いを知るために、Mann—WhitneyのU検定を行った。結果が表3及び表4である。

検定の結果、44項目すべてに有意差がみられた。5%水準で有意であった一項目を除き、他は全て1%水準で有意差があった。

中央値や平均順位、あるいは回答の分布を参考に、それぞれの設問に関して二群のどちらがより危険と感じていると考えられるかを検討した。

教職志望学生の方が非志望学生に比べてより危険と認識していると推測されるのは、「たばこを吸う」、「お酒を飲む」、「賞味期限の過ぎた食品を食べる」、「食品/食材の購入時に添加物等を確認しない」、「食品/食材の購入時に産地を確認しない」、「横断歩道がないところで道路の横断をする」、「自転車に乗る前に整備を行わない」、「自転車に乗りながら携帯電話で通話する」、「バイク（原付も含む）に乗る前に整備を行わない」、「バイク（原付も含む）に乗りながらの携帯電話の操作」、「バイク（原付も含む）運転中に携帯電話で通話する」、「バイク（原付も含む）に乗る時しっかりヘルメットをかぶらない」、「車の運転をする前に整備を行わない」、「車の運転をしながらの携帯電話の操作」、「車の運転をしながら携帯電話で通話する」、「寝たばこを吸う」、「かかとの高い靴を履く」、「歩きながらたばこを吸う」、「携帯電話を見たり操作しながら歩く」、「歩きながら電話の通話をする」、「本や雑誌を読みながら歩く」、「ipod等の音楽用機器を使いながら歩く」、「運動前の準備運動をしない」、「運動後のクールダウンをしな

い」、「長時間の運動」、「炎天下の運動」、「競技水準が違う人が同時に運動すること」、「駆け込み乗車をする」、「電車の優先席近くで携帯電話を使用する」、「火災に対する備え・対策をしない」の各項目である。

逆に、教職志望学生が非志望学生に比べて危険の認識が薄いと推測されるのは、「食事の前や帰宅時に手を洗わない」、「交差点や横断歩道での安全確認をしない」、「横断歩道で信号の点滅時に横断する」、「赤信号で道路の横断をする」、「自転車に乗るときに安全運転を心がけない」、「自転車に夜乗るときのライト点灯しない」、「自転車に乗りながらの携帯電話の操作」、「バイク（原付も含む）に乗る時に安全運転を心がけない」、「車の運転をするときに安全運転を心がけない」、「ガス機器の使用時は換気扇を使わず窓も開けない」、「コンセントに濡れた手で触る」、「運動時に十分な水分補給をしない」、「駅のホームの端を歩く」、「地震に対する備え・対策をしない」の各項目であった。

この中で5%水準で有意だったのは「バイク（原付も含む）運転中に携帯電話で通話する」の項目のみである。

これをもとに、各設問をまとめて分類し、教職志望学生が非志望学生より危険と認識している領域を見てみる。「歩行・ながら歩き」は教職志望学生が全ての項目でより危険と認識していると考えられる。「運動」の領域では「運動時に十分な水分補給をしない」以外の5項目で教職志望学生の方がより危険と認識しているようだ。また「食品・嗜好品」の領域では「食事の前や帰宅時に手を洗わない」で、「バイク」の領域では「バイク（原付も含む）に乗る時に安全運転を心がけない」以外の全項目で、「自動車」の領域では「車の運転をするときに安全運転を心がけない」以外の全項目で、教職志望の学生の方がより危険と認識していると推察された。さらに、「電車・駅」の領域でも、教職志望の学生の群がより危険と認識している項目が多いが、ただこの領域は含まれる項目数が少ないので、断定的な解釈は難しいと考えられる。「その他」の領域、すなわち「寝たばこを吸う」の項目は教職を志望する学生の方がより危険と考えているようだ。

逆に教職を志望している大学生が教職を志望していない学生に比べて、危険の認識が薄いと思われる領域は「交差点・横断歩道」、「自転車」の二つである。「交差点・横断歩道」の領域では、「横断歩道がないところで道路の横断をする」以外の全項目で教職を志望している群の方が安全・危険に関する認識がやや薄いようだ。「自転車」の領域では、「自転車に乗る前に整備を行わない」と「自転車に乗りながら携帯電話で通話する」以外の項目で、教職を志望している群の方が安全・危険に関する認識がやや薄いと考えられる。

「災害」の領域では、教職を志望する学生と志望しない学生の群とでより危険を認識していると考えられる項目の数に差がなかった。

表3 教職志望学生と非志望学生の危険認識の違い (1)

		教職志望者		非教職志望者		
		Me	A. R	Me	A. R	
食品・嗜好品	たばこを吸う	1.0	33.1	2.0	35.8	**
	お酒を飲む	2.0	30.5	2.0	38.3	**
	賞味期限の過ぎた食品を食べる	2.0	32.7	2.0	33.8	**
	食品/食材の購入時に添加物等を確認しない	3.0	33.7	3.0	35.8	**
	食品/食材の購入時に産地を確認しない	3.0	32.1	3.0	33.3	**
	食事の前や帰宅時に手を洗わない	2.0	34.9	2.0	33.0	**
交差点・横断歩道	交差点や横断歩道での安全確認をしない	1.0	38.2	1.0	35.7	**
	横断歩道で信号の点滅時に横断する	2.0	34.9	2.0	34.7	**
	横断歩道がないところで道路の横断をする	1.5	33.3	2.0	36.3	**
	赤信号で道路の横断をする	1.0	41.7	1.0	41.6	**
自転車	自転車に乗る前に整備を行わない	2.0	32.0	2.0	33.3	**
	自転車に乗るときに安全運転を心がけない	1.0	38.6	1.0	36.6	**
	自転車に夜乗るときのライト点灯しない	1.0	37.2	1.0	36.6	**
	自転車に乗りながらの携帯電話の操作	1.0	38.8	1.0	38.7	**
	自転車に乗りながら携帯電話で通話する	1.0	37.9	1.0	38.3	**
バイク	バイク（原付も含む）に乗る前に整備を行わない	2.0	32.7	2.0	32.8	**
	バイク（原付も含む）に乗る時に安全運転を心がけない	1.0	42.2	1.0	41.8	**
	バイク（原付も含む）に乗りながらの携帯電話の操作	1.0	43.3	1.0	43.4	**
	バイク（原付も含む）運転中に携帯電話で通話する	1.0	43.7	1.0	43.8	*
	バイク（原付も含む）に乗る時しっかりヘルメットをかぶらない	1.0	40.5	1.0	40.7	**
自動車	車の運転をする前に整備を行わない	2.0	31.1	2.0	33.2	**
	車の運転をするときに安全運転を心がけない	1.0	43.3	1.0	42.6	**
	車の運転をしながらの携帯電話の操作	1.0	42.9	1.0	43.0	**
	車の運転をしながら携帯電話で通話する	1.0	41.6	1.0	41.9	**

・ Meは中央値, A. Rは平均順位, \*\*p<0.01, \*p<0.05

表4 教職志望学生と非志望学生の危険認識の違い (2)

		教職志望者		非教職志望者		
		Me	A. R	Me	A. R	
家電・ ガス機器	ガス機器の使用時は換気扇を使わず窓も開けない	2.0	35.2	2.0	32.3	**
	コンセントに濡れた手で触る	2.0	36.7	1.0	33.7	**
その他	寝たばこを吸う	1.0	36.1	1.0	36.9	**
歩行・ ながら歩き	かかとの高い靴を履く	3.0	29.6	3.0	34.6	**
	歩きながらたばこを吸う	2.0	31.3	2.0	34.3	**
	携帯電話を見たり操作しながら歩く	2.0	32.7	2.0	36.8	**
	歩きながら電話の通話をする	2.0	30.6	3.0	34.6	**
	本や雑誌を読みながら歩く	2.0	34.5	2.0	34.8	**
	ipod等の音楽用機器を使いながら歩く	2.0	32.2	2.0	33.9	**
運動	運動前の準備運動をしない	1.0	32.3	2.0	37.7	**
	運動後のクールダウンをしない	2.0	32.8	2.0	34.3	**
	運動時に十分な水分補給をしない	1.0	39.1	1.0	38.6	**
	長時間の運動	2.0	32.6	2.0	34.0	**
	炎天下の運動	1.0	33.6	2.0	36.5	**
	競技水準が違う人が同時に運動すること	2.0	28.3	3.0	34.8	**
電車・駅	駅のホームの端を歩く	2.0	35.0	2.0	32.6	**
	駆け込み乗車をする	2.0	35.0	2.0	35.7	**
	電車の優先席近くで携帯電話を使用する	2.0	30.3	2.0	33.7	**
災害	地震に対する備え・対策をしない	2.0	33.9	2.0	33.8	**
	火災に対する備え・対策をしない	2.0	33.8	2.0	34.3	**

・Meは中央値, A. Rは平均順位, \*\*p&lt;0.01, \*p&lt;0.05

## 4 おわりに

本研究では、教職免許の取得を希望する学生の安全に関する意識を広く把握することを目的に、関東地区にある大学三校に通う大学生を対象に質問紙調査を行い、それを基に三種の分析を行った。

まず最初の分析では、教職を志望する学生の安全・危険に関する意識について考察した。その結果「自転車」、「バイク」、「自動車」の領域では他の領域に比べて相対的に危険意識が強く、それもこの順に強くなっていた。「交差点・横断歩道」や「運動」の領域でも比較的危険の認識が強かった。一方、「食品・嗜好品」の領域では危険の意識が低いことがわかった。

二つ目の分析では、教職を志望する学生に関して、危険とは認識してはいるものの、現実には行ってしまうという行動を調べた。その結果、「自転車に乗る前に整備を行わない」、「携帯電話を見たり操作しながら歩く」、「横断歩道で信号の点滅時に横断する」などが上位で、「運動前の準備運動をしない」、「交差点や横断歩道での安全確認をしない」、「運動時に十分な水分補給をしない」などが下位であった。

三つ目の分析では、教職志望学生の群と非教職志望の学生群とで安全・危険に関する意識にどのような差があるかを調べた。ここでは全般的に教職志望の学生の方が危険をより認識していると推察される項目が多かった。領域ごとに見てみると、教職志望学生の群の方が危険と認識しているのは「歩行・ながら歩き」、「バイク」、「自動車」、「食品・嗜好品」、「運動」の領域と考えられた。また教職志望学生の群の方が危険の認識が薄いと考えられるのは「交差点・横断歩道」、「自転車」の領域と思われた。

冒頭に述べたように教職志望学生の安全に関連する意識・行動の実態を把握するとうことが主目的であるので、このようにこうした結果を示したことで本研究の当初のねらいはほぼ達成し、意義があったと考えるが、さらなる研究につながる考察を付け加えたい。

中野ほか<sup>14)</sup>の調査によれば、教育学部の学生への「有害な食品や環境の汚染には常に注意を向けるべき」という質問に対する肯定的な回答が他学部学生より有意に多かったという<sup>15)</sup>。これは本研究の「賞味期限の過ぎた食品を食べる」、「食品／食材の購入時に添加物等を確認しない」、「食品／食材の購入時に産地を確認しない」の設問の結果と同様の傾向を示している。したがって、こうした意識が教育学部の学生の特徴の一つなのかもしれない。

また同じく中野ほか<sup>16)</sup>によれば、教育学部学生は健康であるという自意識が高いという。そして松本<sup>17)</sup>によれば教職を志望している学生はそうでない学生に比して、運動能力が高いという意識が強い傾向があるという<sup>18)</sup>。こうした意識が本研究の「運動」の領域の結果に関連している可能性がある。

さらに、松本<sup>19)</sup>によれば教職を志している学生は、問題解決能力が高いという自意識があり、また人生観に関する質問で「清く、正しい生き方をする」という質問に否定的な回答をした学生が多い傾向にあり、加えて「人や世間の目を気にせず、好きな生き方をする」という質問に対して肯定的な回答を多くした傾向にあるという。本研究の設問の中には、安全に関する行動に関して、それが多少のトラブルを予見させるものがあったり、あるいは社会的な圧力により抑止される可能性がある項目が含まれていた。何か問題が起こった際の解決への自信や、あるいはいわば“世間体”に関して、清く正しい生き方をしなくても良いと考えていたり、他人や世間の目を気にしなくても良いと考えているという、教職を目指す学生がもつ独特の考え方があり、それが本研究の結果を形成する要因の一つにつながったのかもしれない。

このあたりの知見を積み重ね、そして掘り下げていくことが今後の課題となろう。また本研究では質問紙の中にあった自由回答の項目を分析の対象に入れなかったが、これも今後の課題としたい。

註

- 1) 孔 泳泰・川瀬貴恵・吉田 淳 (2012) 教員養成大学に所属する学部生における安全教育に関する意識の日韓比較研究, 日本理科教育学会全国大会要項 (62) p. 303
- 2) 藤井富美子・山田公江 (1983) 教員養成大学の理科教育についてI: 主として実験に対する安全教育の観点から, 名古屋女子大学紀要29, pp. 139-147
- 3) 伊東知之・大野木裕明・石川昭義 (2013) 保育実習生のヒヤリハット認知を高める教材開発研究, 仁愛大学研究紀要, 人間生活学部篇4, pp. 39-52
- 4) 矢吹明子・鯉坂由紀・山田豊子 (2007) 看護基礎教育における「安全意識教育」の実態と課題: 3回生への「ヒヤリ・ハット」体験レポートに対するアンケート調査より, 京都市立看護短期大学紀要32, pp. 1-9
- 5) 荻須隆雄, 斎藤敦能 (1997) 子どもの事故と安全教育: 生活のなかに潜む危険, 玉川大学出版部
- 6) 荻須隆雄, 斎藤敦能, 関口準編 (2004) 遊び場の安全ハンドブック, 玉川大学出版部
- 7) 古田一雄・長崎晋也 (2007) 安全学入門: 安全を理解し, 確保するための基礎知識と手法, 日科技連出版社
- 8) 村上陽一郎 (2005) 安全と安心の科学, 集英社
- 9) 山下文男 (2008) 津波でんでんこ: 近代日本の津波史, 新日本出版社
- 10) 独立行政法人日本スポーツ振興センター (2012) 学校の管理下の災害-25-基本統計一, 独立行政法人日本スポーツ振興センター
- 11) 独立行政法人日本スポーツ振興センター学校安全部 (2013) 学校の管理下の死亡・障害事例と事故防止の留意点 (平成24年版), 独立行政法人日本スポーツ振興センター学校安全部
- 12) 宮下充正・武藤芳照・白山正人・平野裕一編 (1993) フィットネスQ&A: 指導者のための基礎知識 (改訂第2版), 南江堂
- 13) 東京大学身体運動科学研究室編 (2000) 教養としてのスポーツ・身体運動, 東京大学出版会
- 14) 中野照代・藤生君江・鈴木知代・入江晶子・仲村秀子・富安真理・顧 寿智・鈴木みちえ・後閑容子・鈴木三平・任 輝・謝 小燕・張 新宇 (2005) 看護学生と教育学部学生の健康習慣・健康観の比較研究, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要13, pp. 91-104
- 15) この研究では, 教育学部学生との比較の対象になっているのは看護学部学生なのでデータの読み取りには注意が必要である。
- 16) 中野, 前掲書
- 17) 松本卓三 (1995) 工業技術者希望と教職希望についての職業選択の心理的要因の比較, 日本経営工学会誌46 (4), pp. 323-331
- 18) この研究では, 教職を目指す学生の比較の対象が工業技術者志望者であることに注意する必要がある。
- 19) 松本, 前掲書

# Safety Awareness of College-Level Teacher Trainees

Ichiro DEMACHI, Mieko SUZUKI

## Abstract

This paper analyzed three types of questionnaires concerning the safety awareness of college students who are teacher trainees. The first analysis revealed a general awareness of dangers among teacher trainees. Their risk awareness was strongest in the “bicycling”, “motorcycling”, “driving”, “intersection and pedestrian crossings” and “exercise and sports” categories. Their risk awareness was the lowest in the “food, alcohol and tobacco” category. The second analysis revealed actions that teacher trainees performed while being aware of their risk. Actions that were performed included “performance of maintenance before riding bicycles” and “not walking while watching or using mobile phones.” Actions that were not performed included “confirming the safety of pedestrians at intersections” and “drinking sufficient amounts of water while exercising”. The third analysis revealed differences in risk awareness between students in teacher training courses and students in other courses. Teacher training students possessed higher risk awareness for many actions such “walking or do something while walking”, “driving” and “exercise and sports”. They exhibited lower risk awareness for “intersection and pedestrian crossings” and “bicycling”.

**Keywords:** Teacher Training, Teaching Profession, College Student, Risk, Awareness